

# 北 ぞらくろあ

第68号 2021年11月1日 (毎月1日発行)

## 芸備線ストロール① 高たか駅 「真つ赤なケイトウと 紫のノコンギクがお出迎え」

芸備線が危ない。三江線の次は芸備線だと喧伝されている。利用状況の数値も厳しい。今回の新連載は、芸備線に乗る機会を得るのが第一の目的。ストロールは英語でぶらぶら散歩。芸備線に乗って途中下車、駅の周辺を歩いてレポートする。

10月18日(月)の午前7時過ぎ



に、車で庄原駅に向かった。バスセンターの裏手にある駐車場に入る。新装の備後庄原駅を利用するのは初めて。切符の自動販売機はなく、改札の横にある窓口で買う。隣の高駅まで210円。三次行き

業高校の生徒だろう。改札に入ると1・2番線のホームで、跨線橋を渡って3・4番線のホームに降りた。屋根のある跨線橋は昔のままの姿で、懐かしい。ホームには学生たちの姿が目立つ。制服から、西城紫水高校の生徒だろう。ほどなく備後落合行の列車が到着。キハ120形、ディーゼル機関車だ。電化されていないローカル路線用に開発された車両で、一両のワンマンカー。学生たちが降りるのを待って、後方扉から乗車した。



乗客は15人ほど。学生以外はわたしを含めて2人だけで、芸備線が今でも大切な通学手段だということがわかる。定期便は7時30分、13時38分、15時31分、18時3分の4本。7時40分頃、高駅到着。運転手が見守る前で乗車券を回収機に落として、前方扉からホームに一人、降り立った。車では何度も前を通過したことはあるが、わたしにとって初めて降りる駅である。

列車が出て行くと、対面のホームの後ろにケイトウの赤い群生が現れて、しばし見惚れた。正確にはホームの跡。列車が行き交うために相対式ホームと線路が造られたが、2010年のダイヤ改正で高駅での列車交換がなくなり棒線化され、後に線路も撤去された。

古びた木製の駅舎は、昭和9年に庄原線(当時)が備後庄原駅から備後西城駅まで延伸した際に開業した当時のものだろう。ホームと駅舎の間には、ノコンギクの紫色の花が咲き乱れている。

改札はなく無人駅。駅前の通りを少し歩くと、国道183号線が出る。西城方向に進むと「吉備津神社」の標識、参拝して行くことにする。国



道を右に折れて、踏切を渡ると旧道の市道市場線に出る。

参道の苔むした石段が見えた。大きな燈籠に引き寄せられた。その燈籠だけ、火袋（火を灯す処）の部分が木で出来ている。側面の向かい合っている板が、それぞれ丸と三日月に削り抜かれている。丸は太陽、三日月は月を表現していて、昼も夜も明るく照らしますという意味。厚い信仰心の象徴なのだろう。

小柄だが威厳のある社殿に参拝した。建物の中から太鼓の音色が聞こえる。どこからか流れてくるラジオ体操の音声がシンクロして、なんだか楽しい気分になった。

旧道を西城方向に歩くと、右手に巨木が見えた。一段高い丘の上に生



えているので、余計に大きく見える。一本だけでこんもりした森のようだ。後で高自治振興センターを訪れたときに確認したら、ケヤキの木だと教えてくれた。無名の巨木だが、その威容に圧倒された。

果樹園の中に設置された和蜂（日本蜜蜂）の巣箱、暖簾のような軒下の吊るし柿、大きな栗の木等々、寄り道もしながらのんびり歩いて、世尊寺の前に出た。本誌の連載企画「旧三上郡三十三か所霊場」の第二十六番札所として紹介した名刹である。

参道のそばの「千人塚」は、西城・大富城の宮氏と篠津原・雲井城の山内氏が西城川・段司河原で戦ったときの戦死者を弔ったものだ。上流にある段司河原を訪れてみたいと思っ

たが、またの機会にする。

国道に出て、五反瀬橋を渡って西城川の向かい側に出た。構造改善が進んだ田んぼは見晴らしが良く、飼料用の稲を発酵させるために梱包した白いロールが並んだ光景は、まるで北海道のようだ。未来の農家の姿だろうか。

河原に降りて、しばし水辺を散策。古代には海底だった巨岩が顔を覗かせている。この下流で、庄原クジラの化石が発掘された。丸い蠟石を見つけて岩に白い線を引き、子供時代の遊びを思い出した。

新生橋を渡って国道に戻り、庄原方面に下って「大御堂」を再訪した。「旧三上郡三十三か所霊場」の第二十四番札所で、小用・龍福寺の末寺だったという記録があるが、昭和19年にお堂が焼失、現在はコンクリートブロックの慰霊堂が建っている。

毎年8月には「高地区戦没者慰霊祭」が開催されている。「高駅からは多くの青年たちが戦場に向かいまして」、「芸備線―中国山地の沿線物語」（武田祐三著）に、当時の光景が抒情豊かに紹介されている。勝新太郎似のご本尊に、焼香して合掌した。

高駅に戻るとすでに11時を過ぎていた。「駅前ショップさだみつ」で、おにぎりや月見団子、大福を買って早めの昼食。店内は、食料品の他にも文房具や衣類なども商っている。老齢の女性店主に話を訊くと、開店して七十年ぐらい。経営は厳しくな

る一方だそうだが、こうして買い物できて感謝、である。

駅舎の長椅子で食事、歩き疲れたのか甘いものがおいしい。最後に、ポケットから丸々とふとつた柿を取り出してかぶりついた。うまい！畑仕事をしている人に声をかけられて、木から一つ頂戴した。

エネルギーを充填して、さてこれからどうするか。庄原方面行きの次の列車は13時26分、いや、臨時列車で平日の便はなく、15時16分。このあたり、2時間ぐらい駅の周辺を散策して、9時42分の定期便で帰るのが無難だろう。

ペットボトルのお茶を飲み干して立ち上がった。コロナ禍の自粛で、歩くことに飢えている。国道に出て、速足のウォーキング。車が少ないので、排気ガスも気にならない。

途中、広い河原で缶コーヒー・ブレイクしたり、橋を渡って向う岸を散策したりと寄り道したこともあって、庄原駅まで2時間かかった。さすがに疲労困憊だが、気分は爽快、持病の腰痛も調子が良くなった。

問題はトイレだが、高駅に施設はない。近くの自治振興センターや郵便局で利用させてもらえるだろう。県北が散歩やウォーキングの盛んな土地になり、民間の有志が自宅のトイレや休息所を提供する。四国霊場の「お接待」のような場所が増えればと、川音のする道を歩きながら夢想した。

# 絲山秋子『沖で待つ』

## 総合職女性が職場に進出

1986年に女性の職場進出を促す男女雇用機会均等法が施行され、女性総合職という耳新しい言葉を聞くようになりました。有能な男と並ぶ昇進のコースが用意されるのですが、地方への転勤あり、夜勤ありの過酷な労働も準備されていました。絲山秋子『沖で待つ』(04年刊、文藝春秋)は、そんな総合職の女性の職場を描き注目を浴びました。

ただし、きつい仕事ぶりを描くというより、共に配属された同期の男性「牧原太(ふとし)」と言い合いながら助け合う、同志愛が哀愁を帯びて描かれています。

就職先は、東京の住宅設備機器メーカー。3週間の研修の後、福岡へ配属されます。「私」は男尊女卑の九州男児にいじめられるのではと、思い込んで赴任するも、街は明るくきれいで、2人とも拍子抜けします。

「私」はそれなりに誰とも仲良くやっていくのですが、会社で「苦手な場所が2ヶ所」あります。更衣室と給湯室です。事務職の女性たちが

盛り上がっているところに入っていると、「みんな笑顔でお疲れさまです」と言ってくれるのですが、その後の

仕事は特約店や設計事務所やクレーム現場です。ユニットバスの搬入経路、天井パネルの梁型加工の要不要といった打合せや、ガス給油器が壊れた、浴槽にクラックが入った、とのクレーム対処などです。牧原太は、丸々と太っているの

半は、太っちゃんが突然死し、私が太っちゃんの部屋に忍び込み、ハードディスクをそっと壊すスリルが展開します。

芥川賞の選考委員会では、多少意見が分かれました。積極的に押しした2人の評を取りあげてみます。

「現代文学ではいろいろな職業が扱われているが、文学青年の眼が貼りつきがちで、大きく成功している例には出会えない。現代の職業をこれほどまでに自由に書きこなした新しさに瞠目する」(河野多恵子)、「女性総合職の出現によって女と男の対等に働く場が生まれた。その新しさがいかなる意味を持ち、どのような可能性を人間にもたらしたかを追求したのが本作であるといえよう」(黒井千次)。

この後、津村記久子、本谷有希子らが、「職業小説」を描いて後に続きました。が、あたかも浮上した非正規労働者の増加という労働市場の現実さに押し返されてしまいました。

若い男女が共に働く場合、友情と恋愛は交差し勝ちです。きわどい会話をしながらも、そこを峻別しているすがすがしさに着目したいです。

次回は、赤坂真理『東京プリズン』を取り上げます。

### また読んでみたい本⑥⑥

青年たちに

音谷 健郎



【文藝春秋版の表紙】

古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思い、毎月1冊ずつ紹介しています。

第66回は、絲山秋子の『沖で待つ』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧・庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

言葉は『もう福岡には慣れましたか?』という完璧な標準語なのですか? 井口さんみたいなベテランの人でも、会社を辞めるまでは決して丁寧語を崩してくれませんでした。…更衣室と給湯室ではいつも旅行者みたいな気分”になるのです。

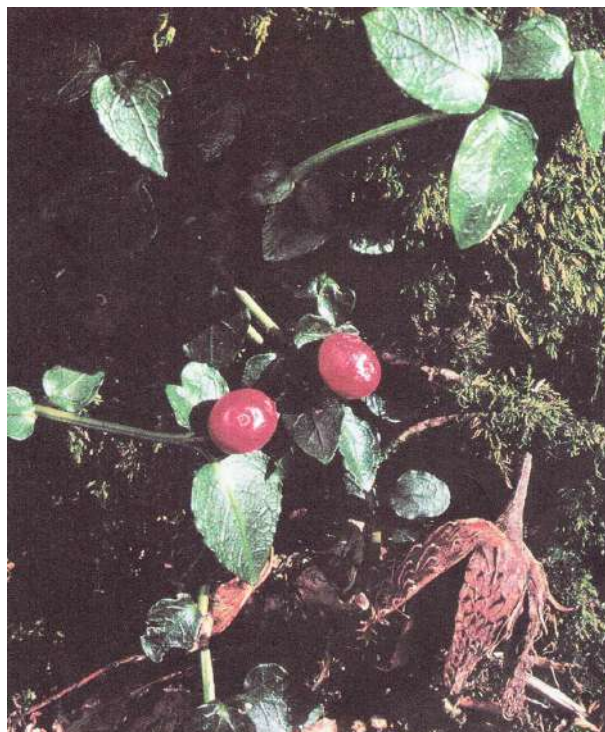
「太っちゃん」の愛称で呼ばれるのですが、ある日、「おまえさ、秘密ってある?」と持ちかけてきます。お互いのどちらかが突然に死んだら、秘密が蓄積しているパソコンの心臓部のハードディスクをこっそりと壊すことを提案してきました。作品の後

## 「山の歳時記」

### ツルアリドウシ 冬でも青葉で真つ赤な実

木はすっかり葉を落とし、静まり いたくなるほどです。

かえっている林の中で、ツルアリドウシの花が咲いたのは初夏、花が散ってからもう六カ月前も。また、枯れずにみずみずしい緑色の葉を見ると、山に冬がほんたうに訪れているのだろうか、疑問。雪の中でも実を落とさず、翌春、雪どけの頃にも



まだ実をつけています。このようにとても長い間、実をつけてとうしているの、アリドウシというのは実が茎の先に「あり通し」ているということからアリドオシと言われるようになったという説があ

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

るようですが、ほんとうはアリドウシという植物の小枝には鋭くて細長いとげがあり、そのとげがアリをつきとげすほどという意味から名づけられたようです。

ツルアリドウシはアリドウシと同じなかまですが、茎にとげはありません。アリドウシは小さな低木です。見かけはアリドウシに似ていますが、ツルアリドウシは小さな草で、茎がつるのように地面をはっているの、ツルアリドウシと名づけられたようです。

ツルアリドウシは実を長い間、落とさずつけているふしぎな植物ですが、ふしぎというと、北海道から九

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

州までの山と韓国南部の山に分布しているツルアリドウシと同じ種類ではなからうかとよく似ているアメリカツルアリドウシが遠く離れた北アメリカ東部に分布しているのです。どうして、アジアの東の一部と北アメリカの東部にツルアリドウシが生き続けているのか、深い謎です。アメリカでは真つ赤な実を長い間つけているので、観賞用に育てている人もいるそうです。

雪のつもる前や雪どけの頃、山を歩くと思わぬ発見があります。寒さに負けず発見を求めて野山に飛び出してみましょう。

### 比婆連峰のブナ林 深まりゆく秋の原生林

経(たて)もなく緯(ぬき)も定めず 少女(をとめ)らが織れる黄葉(もみち)に 霜な降りそね

これは萬葉集巻八に収められている大津皇子の歌です。美しく黄葉(も

みち)した山を、縦糸も横糸も定めず少女たちが織りあげた美しい布に見たててよまれた歌で、霜よこのうつくしい黄葉を枯らさないでと願う心がひしひしと伝わってくる名歌だと思えます。

秋というと「もみじ狩り」のように、萬葉のむかしから秋のもみじは人びとの心をとらえて離さないものがあつたようで、萬葉集には数多くのもみじをよんだ歌が収められており、今に伝えられています。



(写真はいずれも小川光明氏撮影)

今、私たちはもみじに紅葉という漢字を当てていますが、萬葉のむかしは黄葉という漢字を用いていました。もみじの当て字が黄葉から紅葉にかわったのは平安時代だそうです。どうして紅葉に変わったのか定かではありませんが、古代から中世へ移りかわる中で日本人の色彩感覚に変化が生じたのかも知れません。比婆山連峰の麓(ふもと)に生まれた私にとって、ブナ林は自己の精神形成の基層に深くかかわっているように思えてなりません。

秋、黄色に染まったブナ林はまさに萬葉集にいう「黄葉(もみち)」の世界、深まりゆくブナ林の秋に浸りながら、萬葉のむかしや古事記の世界に思いをはせ、みずからの自然観を培うとともに、森から生まれた文化を次の世代に語り継いでいきたいと思うこのごろです。

## 「つれづれ歌談」⑬

松岡初枝



貧窮問答歌 山上憶良(前半問)  
風まじり雨降る夜の 雨まじり雪降る夜は すべも無く寒くしあれ  
ば堅塩(かたしお)を取りつづろひ 漕湯酒(かすゆさけ)うちす  
すろひて しはぶかひ鼻びしびしに しかとあらぬ鬚かき撫でて  
我れをおきて人は在らじと 誇(ほこ)ろへど寒くしあれば 麻  
衾(あさぶすま)引きかがぶり 布肩衣(ぬのかたぎぬ)有のこと  
ごと 着襲(そ)へども寒き夜すらを 我れよりも貧しき人の 父  
母は飢へ寒(こ)ゆらむ 妻子(めこ)どもは乞(こ)ふ乞ふ泣くら  
む この時はいかにしつつか 汝が夜は渡る  
風交じりの雨、雨交じりの雪の

夜はどうしようもなく寒い。塩をつまみ糟汁をすすする。咳をして鼻をぐずぐずさせ、まばらな鬚をなでながら、我こそは立派よと誇ったところでそれでも寒い。麻の布団をひっかぶり、ありったけの着物を着ても寒い夜には、自分よりも貧しい人の父母は、飢えも手伝ってなお寒いことだろう。妻や子もしくしくと泣いているだろう。こんな時、おまえさん達は何体どうやって過ごしているのかね。

山上憶良の長歌の前半です。萬葉集の長歌の中でも最長の中の一首です。この前半は、憶良よりもずっと下級の役人の一人に見立てて詠んでいます。粗末な家で、むしろを敷いたりしている生活。役人とは名ばかりの下っ端の一家などは、この歌のような暮しだったのでしよう。私のような者達、それでもまだまだ貧しい人よりはましだろうと、この小役人に言わせたい憶良です。後半も含めてこの歌を、民部卿の県守(あがたもり)に献上した憶良は、治政者は世の中を見てほしいと心底思ったのです。

日本海から吹き付けるみぞれ混じりの雨が窓を叩いている。高校の体育館の中央に設置されたリングでは、ピエロの仮面を被った大柄な女子レスラーが、合掌した手を震わせて許しを請うている。金髪の小柄なヤンキーガールが拳を振り上げると、マットの上に這いつくばって、ペコペコと土下座した。半分ほど埋まった客席から笑いが漏れた。

ヤンキーガールがピエロの頭を踏みつけると、悲鳴を上げて手足をばたつかせた。ピエロの真っ赤な髪を掴んで引きずり上げると、首に腕を絡めてのヘッドロック、ローリングするよう大きく締め上げる。悲鳴が大きくなる。

スポンという擬音が聞こえたような気がした。ヤンキーが手にしたピエロの仮面を見て唾然としている。マットの中央に、歯をむき出して赤い目をした凶暴なピエロが仁王立ちしている。場内の空気が変わった。

ピエロがヤンキーの顔を鷲掴み、そのまま揺ぎむしった。首を掴んでのチョーククロー、そのまま片手で持ち上げる。レフリーにカウントされる、トップロープから場外に放り投げた。それからは場外乱闘だ。ピエロがパイプ椅子を掴んでヤン

キーの背中に打ち付けると、客席から悲鳴が上がった。

コーナーポストの上で立ち上がったピエロが、右手を高々と上げてアピール。場内にブーイングが満ちる。大きくジャンプして、マットの中央で伸びているヤンキーにボディプレス、しかし、直前で身をかわされて自爆になった。

それからは、ヤンキーの独壇場だっ

# ジョーカー

あきふゆひこ  
亜木冬彦

現代御伽草子 ⑥2

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

た。前方に一回転してのローリングボディプレス、相手をロープに飛ばしてのフライングクロスチョップ、最後はコーナーポストからのムーンサルトプレスを鮮やかに決めて3カウント、大団円で勧善懲悪のドラマは終結した。

試合後のサイン会では、地元出身の看板選手であるサノウ・マコト

の前に、長い行列ができていた。ヤンキーガールの前にも、そこそこ人が並んでいる。腕組みしたピエロの前には……、誰もいない。

きかん気の強そうな坊主頭の少年が、ピエロの前に近づいてファイティングポーズを取る。うちの田舎では、こういう子供をシゴンボウと言う。軽くパンチを繰り出したら、ピエロが立ち上がった。道化のマスクを剥

て裏表紙をめくると、やはりうちの値札の付箋が貼ってある。

カバールの背を見ると、真ん中辺りの両端が少し擦れて色が褪せている。スズキさんの本に間違いなかった。

「本を読むのだけが楽しみでね」

無類の読書家で、在庫にない本をよくリクエストした。ネットで探して実費で取り寄せるサービスもしているのだ。

読み終わった本を持参して違う本をリクエスト、少し困った。返却した本の半額を、新しく購入する本の代金から引くようにしているのだが、リクエスト本は実費なので、それだと赤字になってしまう。しかし、スズキさんの笑顔を見ていると、何も言えなくなってしまう。

赤字の心配は杞憂だった。スズキさんの本はよく売れたのだ。鈴木英治の「口入屋用心棒」シリーズ、逢坂剛の「百舌」シリーズ、今野敏の警察小説等々。最初の鈴木英治のイメージが強いので、内心、スズキさんと勝手に呼んでいた。

身の上話をしたことはないが、地元生まれではないようだった。分厚くて、ゴツゴツと節くれだった手をしていた。きつい肉体労働をして

ぎ取って、悪魔のピエロの顔で「シャーッ！」と威嚇した。シゴンボウが飛んで逃げる。一月ほど前のことを思い浮かべた。ピエロのマスクをしたまま、店に入ってきたのである。

「これ、引き取ってもらえますか？」抱えてきた段ボール箱の中を確認すると、文庫本がぎっしり詰まっている。見覚えのあるカバーを見つけ



きた働き者の手だと思った。このザラザラと荒れた指で文庫本を支えて読むので、背の部分が擦れているのだろう。

しばらく来ない時期があつて、久しぶりに来店したら、やつれて精気のない顔をしている。

「酒で肝臓がやられていてね。もう長くはないんだ。だけど、働かないと食えないんでね」

ホテルの清掃の仕事をしているそうだが、体調が悪くて出られない日が多くなつたと、まるで他人事のように言った。その日もリクエストした本を受け取って、上機嫌で帰って

行った。

(ダメだったんだな)

段ボール箱の本を見た瞬間、悟つた。スズキさんが顔を見せなくなつて、二カ月以上が経つていた。

「本の査定をしますから、しばらく待っていてもらえますか」

香典代わりに、色を付けるつもりだった。

「お金はいいです。本を引き取つてもらうだけで十分です」

「いや、そんなわけには……」  
逃げるようにして出て行った。

「サインをお願いします」

そう言つて頭を下げると、怪訝そうな目で睨まれた。「ミス・ジョーカー」と書かれたプレートの前に、一冊の文庫本を置いた。山本周五郎の「日本婦道記」、周五郎の初期の短編を集めている。

じつと本を見て考えている。顔を上げたときには、驚きの目でわたしを見た。どうやら、思い出してくれようだ。

「本の中に写真が挟んであります」

おぼろと本を取り上げると、パラパラとページをめくつた。

その写真は、「糸車」という短編小説のページに挟んであった。信濃

のくに松代が舞台だ。十九歳のお高は、卒中を思う父と十歳の弟との三人家族。父の病気で半減された扶持を補うように、糸繰りの内職に精を出している。

お高は養女だった。本当の両親が貧しく、まだ乳飲み子だったお高を養女に出したのだ。しかし、その後実父は出世して、勘定方の要職に就いていた。養父はお高のためを思い、実の両親の所へ行くようにとお高に冷たく当たる。実の両親も、お高を温かく迎え入れてくれた。しかし、養父の本当の思いを知るお高は、実母の愛情に押し流されようとする気持ち必死で抑えて、松代の家に帰って行くのだった――。

写真を見つけた彼女の身体が静止した。凝視している。

「バカヤロウ」

ぼそりと吐き捨てた。そして、唐突に立ち上がると、何かを振り払うように激しく頭を振つた。赤い髪の毛を両手で掻きむしって、悪魔のピエロの仮面を剥ぎ取つた。そして、絶叫しながら死神の顔でわたしを睨んだ。

ボロボロと黒い涙が溢れている。仮面の向こうに、写真のかわいらしい少女の顔が透けて見えた。

## まつの古本屋さん どろ書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
- ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。

※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30 ~ 18:30

※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

< 広告料 1/4 ページ 1 回 2,000 円 半年間 9,000 円 1 年間 15,000 円 >

寄稿エッセイ

はなぬすびと

# 良寛さんの花盗人

高柴順紀

(菊栽培農家)

## ——良寛さんの世界に菊を探す

他家の庭先に咲き乱れている馥郁

(ふくいく)とした菊におもわず手が  
出た良寛さん。菊の一枝を持ちなが  
ら小春日和の中を歩いて行ったので  
しょうか。でも運悪くこの花盗人の  
風情ある行為を物陰からその家の主  
が見ていたのです。この経緯が庄屋  
の解良栄重による『良寛禅師奇話』

に出ています。

上人一日、山田ノ駅某ガ菊ノ花ヲ  
折ル。主人見トメテ花盗人也トシ、  
其ノ図ヲ絵ニカキテ是ニ賛ヲセハユ  
ルサント云フ。上人筆ヲトリテ、良  
寛僧ガケサノアサハナモテニグル、  
オムスガタ後ノヨマデ残ラム

(※「オムスガタ」は、御姿よりは恐  
れる姿と読みたい)

当ても高名な良寛さんの書は人気  
が高く、それに目を付けて賛（絵に  
添える詩文）を強制したのでしよう。  
真面目な良寛さんは素直に賛はして  
いますが、自分の小さなワルを楽し  
く表現しています。お茶目な良寛さ  
んと言えましようか。

花盗人といえれば時代は遡りますが、  
松岡初枝さんの表現を借りれば「美  
しいって罪なのね」を地でいった和  
泉式部に身も心も奉げたある御仁の  
ことが連想されます。好きな女性に  
いいところを見せようと、これも高  
貴な方の桜を手折り、歌を詠みます。  
式部が喜んだかどうかは分かりませ

んが、この行為はひんしゆくをかつ  
たと言います。

我が名は花盗人と立てば立て唯  
だ一枝は折りて帰らん

良寛さんと違って女一途の行為、  
許せる花盗人とは到底言えませんが  
気持ちには分かる気がします。男とし  
ては和泉式部に一度会ってみたい。

時は下って西暦一九九〇年の集団  
花盗人の話です。場所は事もあろう  
か「国際花と緑の博覧会」（花博）会  
場でした。国内はもとより世界中か  
ら花や生産者が集まった大きなイベ  
ントでした。東城の菊も政府苑のブー  
スで飾られたり、コンテストに出品  
された東城産のスプレイ菊がその後

世界の主流品種となったりで思い出  
深い花博でしたが、忘れもしない事  
件が最終日に起こったのです。各新  
聞でも取り上げられました。大阪  
のおばちゃんたちが終わったら花は  
いらないんだとばかりに大勢で抜い  
て帰ってしまったのです。朝日新聞  
(一九九〇年十月二十六日)によると  
一万三千株も消えたと報道していま

す。  
「これ、持って帰ってええんやろか」  
「ええんとちゃうの」

花盗人は俳句の季語にもなってい  
ますが、終に花泥棒となってしまう

ました。

さて、話を元に戻すと良寛さんの  
身の回りに本当に菊があったのかど  
うか気になります。良寛さんは、良  
寛さんを敬愛する多くの人から援助  
を受けていますが、その人たちに  
出した手紙を残している中でその中に  
菊が出ているのではないかと探しま  
した。ある研究者によると、二百四  
十七通もの手紙が残されているよう  
です。全てを見た訳ではありません  
が『良寛禅師奇話』を記した解良栄  
重の三代前の解良叔問に宛てた手紙  
の中に出ていたのです。

「今日は、こんぶ、たばこ、たしか  
に相届き候。先日は菊のみそずけた  
まわり、珍賞味仕候。且又、貧人に  
餅多くたまわり、大慶ニ奉存候。暖  
氣催候ハバ、参上度仕候。敬具。  
正月廿日

解良叔問老

良寛

「先日はてぬごい、とうふ、菊、着手  
仕候。十月五日

叔問老

良寛

良寛さんも菊を喰ったり愛でたり  
していました。菊屋としては一安心  
です。

《参考文献》

『良寛』（山崎昇、清水書院）

『良寛の書簡集』（谷川敏郎、恒文社）

### 国際花と緑の博覧会

The International Garden and Greenery Exposition,  
OSAKA, JAPAN, 1990  
平成2年4月1日→9月30日  
Apr. 1 - Sep. 30 '90  
大阪・鶴見緑地



財団法人 国際花と緑の博覧会協会  
Japan Association for  
the International Garden and Greenery Exposition,  
Osaka, Japan 1990



普通入場券  
General Admission

大人  
ADULT

¥2,990  
消費税込み

B V 024509

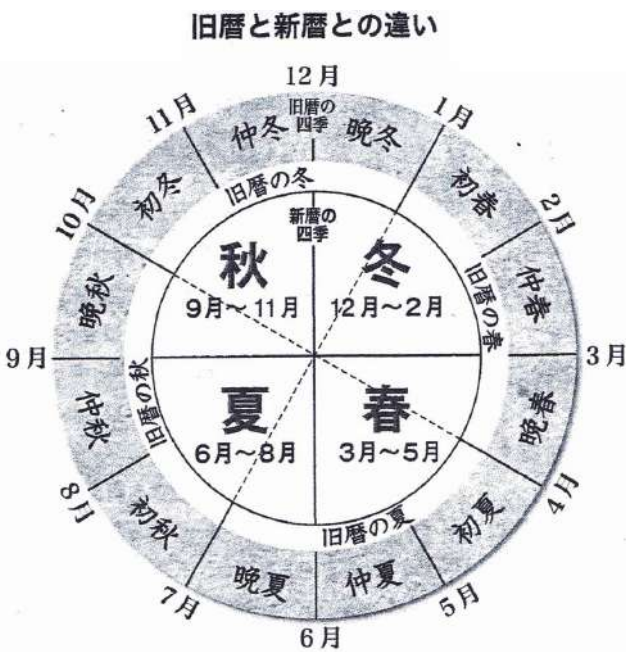
# 「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

「宣明暦」が採用されてから八〇〇年間、世の中も大きく変わり、特に長く続いた貴族社会から武士の社会へと替ったことが影響しているのかも知れない。江戸時代になっても宣明暦は使い続けられていたが、夏至、冬至、月食などの予報が二日もずれてきたので、民間の暦学者からも激しい批判が起こるようになった。そ

ここで、暦学で二千年遡り、京都を中心とした日本独自の「暦」を渋川春海（しゅんかい）が天和（てんな）三年（一六八三年）に『貞享暦（じょうきょうれき）』（大和暦、やまとこよみ）を作り上げた。この経緯を題材にした小説に、沖方丁の「天地明察」（二〇一二年映画化）がある。

それ以後、宝暦五年（一七五五年）



に改暦された『宝暦暦』が四十三年間、寛政十年（一七九八年）に改暦された『寛政暦』が四十六年間、弘化（こうか）元年（一八四四年）に改暦された『天保暦』が二十九年間採用された。この天保暦を最後に「太陰太陽暦」は「旧い暦」（旧暦）とされ、明治五年（一八七二年）に採用された「グレゴリオ暦」（太陽暦）を「新しい暦」（新暦）としたのである。世に言う『明治の改暦』である。

## 一 「旧暦」の本質の部分

『新暦』と言う用語は、明治五年十一月九日の太政官布告三三七号の「改暦の布告」の中で用いられている。新暦の太陽暦は、地球が太陽の周りを一公転する時間を一年とするもので、対して太陰暦は太陽の運行とは関係なく、月の満ち欠けを基準にして暦を組み立ててあるから、太陽暦よりも約十一日くらい一年が短い。太陰太陽暦（旧暦）は前の二つの要点を取り入れたものである。

**旧暦での四季** 四季は温帯地方の一年間の気候を、春・夏・秋・冬の四つに区分したものを言う。区分の方法には、天文学上と気候学上の二つがある。前者は、春（春分から夏至前日まで）、夏（夏至から秋分前日まで）、秋（秋分から冬至前日まで）、冬（冬至から春分まで）である。後者は、春（三月～五月）、夏（六月～八月）、秋（九月～十一月）、冬（十二月～二月）である。これが、今私たちが新暦（太陽暦）として用いているものである。

旧暦では、節切り、月切りというものに分けられている。節切りは、春（立春～立夏前日）、夏（立夏～立秋前日）、秋（立秋～立冬前日）、冬（立

冬～立春前日）である。月切りは、春（一月～三月）、夏（四月～六月）、秋（七月～九月）、冬（十月～十二月）である。

**旧暦でのひと月の始まり** 暦法の月、つまり、暦の上での一か月は、小の月を二十九日、大の月を三十日とし、平年は354日か355日で一巡する。太陽の運行との調和（季節の調整）をはかるために、後に述べる閏月（うるうづき）を置き、その年は、一年が十三か月となる。そして、ひと月は新月から始まり次の新月の前日までとした。また、その月の第一日を朔日（ついたち）と言う。ツイタチは「月立ち」が訛ったもので、月の始めの日の第一日は月が立ち始める日、すなわち月が太り始める日を意味している。

**旧暦での一年の始まり** 旧暦では一年の始まりが春の第一日目になっている。後に述べる二十四節気の「立春」は新暦では二月四日、節分の日翌日です。この日に近い新月を一月一日と定めて春がスタートする。「新春お喜び申し上げます」というあいさつが、その名残である。

（著者は広島市安佐地区の郷土史研究会「安佐通史会」会長。「旧暦カレンダー」普及に尽力している。）

## どろくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

天高し少年天守閣が好き

近藤 昌平

秋風に聴くやポストの在りどころ

富久光

おだやかな時の過ぎゆく敬老日

片岡 正人

銀行も今日は休んで秋祭

西谷 白及

水清し魚影も消えた里の川

隆愚

高僧の法話偲ぶや菊日和

大楨 三代子

コンクリが丸石となり秋の川

赤川 冬人

秋刀魚焼く我がの小さき厨辺は

松岡 初枝

待ちにし秋の香の満ちみちて

## 投稿&寄稿

候のことば

隆愚

「落ち葉焚き」

道沿いの垣根に、山茶花（さざんか）の花が咲いていると、ふっとそこが明るくやわらいだような印象をうけます。落ち葉を掃き集めて家の

前で焚き火をするなど、今では見かけなくなりりましたが、童謡に歌い継がれる通り、初冬の風物詩です。もともと中国ではツバキ科の花を総じて山茶というらしく、山茶花の花が椿に似ていたため、混同されてその名がつけられたようです。

山茶花の垣一重なり法華寺

夏目漱石



## 「運の総量」

赤川仁洋

本は恩人である。娯楽であると共に、人生の指針となる本に出会うことがある。どんな本ですか、と問われて真っ先に思い浮かぶのが、阿佐田哲也の「新麻雀放浪記」。直木賞作家の色川武大が「朝だ徹夜だ」を文字った別名義で書いたギャンブル小説。元々が氏の小説の大ファン

だったのだが、この小説は一味違う。人生哲学を語っているようにも思えたのである。

「運氣には波があつてその量も定まっている」、作者のギャンブル理論である。ツキには限りがある。そのツキをうまく活かした奴がトータルで勝つことになる。問題は運氣がどん底のときで、何をやっても裏目に出る。そういうときは、ガードを固めて、ツキが来るまでひたすら我慢する。そのためには自分の基本となるフォームが必要になる。

自分の運氣が落ちていいるなど感じるとき、このギャンブル理論を思い出す。体調も含めて、気分が滅入って何もする元気がない。そういうときは自分の基本のフォーム、つまり、やるべきことを先延ばしにしないで地道にやり、平凡な日常を積み重ねていけば、いつの間にかツキが変わる……。

運に定量があるのであれば、無駄使いはしたくない。無謀なことをやって、そのときは運よく乗り切れたとしても、大切な自分の運をすり減らすことになる。運、不運をよく人は口にするが、トータルでならしてみると、運の総量にそんなに違いはないと思うのです。

# どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など  
情報掲示板です。

- **一 硬式テニス参加者募集 一**  
 MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)  
 場所：三次運動公園の屋内&屋外コート  
 ・火曜日 (9:30 ~ 12:00)  
 ・水曜日 (9:30 ~ 12:00)  
 ・土曜日 (10:00 ~ 12:00)  
 連絡先：中川 (☎070-8991-1682)



## 「旧暦カレンダー」 (販売価格：1,650円)

- 日本の自然に根差した暦 (こよみ) です。
- 太陽暦でも太陰暦でもない、「太陰太陽暦」です。
- 新暦 (太陽暦) も併記しているので便利です。
- 季節の行事や呼び名の意味が、より深く理解できます。
- 自然災害の予測ができます。

どら書房にて令和4年度版 予約受付中!

## 《情報&原稿を募集します!!》

- 仲間募集
  - 教室&講座案内
  - イベント情報
  - あなたの大切な本の紹介
  - ボランティア・ライター (現地記者) 募集!
- ※応募先はどら書房・赤川まで。  
掲載は無料です。

## どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して  
いるので、ダウンロードして  
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

## 徳岡政暁 陶芸作品コーナー

陶芸家、画家 (徳岡佛性坊) として多彩な活動をしてきた故・徳岡政暁氏の陶芸作品の展示販売を、どら書房の一角でしています。  
茶碗や花器、陶板や料理皿、多様な作品を展示しています。あなたのお気に入りの逸品が見つかるかもしれません。  
※天井が低いので頭上注意!

## どら書房無人野菜販売コーナー

新鮮で安全な野菜を店頭で販売 (値札のないものは百円均一)。  
毎週水曜日の朝に入荷予定。

### ● 黒ニンニク好評販売中! ●

(青森産ニンニクホワイト六片使用)

甘みと適度な酸味、ニンニク臭さはありません。  
ポリフェノールを含み、抗酸化作用、滋養強壮などの効果が期待できます。

(80g入り 500円)

※売り切れのときはご容赦ください。

発行：どら書房  
〒727-0012  
庄原市中本町 2-1-10  
☎090(9913)3052 (赤川)  
e-mail: touzin@nifty.com

誌面デザイン: ROUTE183  
協賛: 九日市愛好会

## 編集後記

◇ 新企画の「芸備線ストロール」、迷わずにサクサク歩いていますが、うに書いています。高自治振興センターでいただいた「高歴史街道案内図」が原稿を書くとともに役立っています。ありがとうございます。

た。楽しかったですね。

◇ 先月号の「つれづれ歌談」、正岡子規の「柿の実のあまきもありぬ柿の実のしぶきぞありぬしぶきぞうまき」の最後は「しぶきぞうまき」です。訂正すると共にお詫びします。

◇ ついこの前までの残暑が嘘のような厳しい冷え込み、わが家はもうコタツを出しています。

◇ 「今月の3冊」は今回はお休みします。

第 244 回

# ひょうばらくんちいち 「庄原九日市」

令和 3 年 11 月 9 日 (火) 9:00~13:00

## 庄原九日市とは？

天正年間（440 年前）に物々交換で始まった市（いち）

昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し 2001 年に復活

## TOPICS

### ★市民ギャラリー「アート多愛夢」

11月7日～9日 10時～15時

森原多美子水彩画展

### ★どら書房→休憩所あります！！

月曜日と火曜日はお休み

但し、九日市の日は営業します。

### ★楽笑座「まかない食堂」中止

★楽笑座「うた声喫茶」再開 13:30～15:00

★きくや→総菜とお寿司の店頭サービス！！

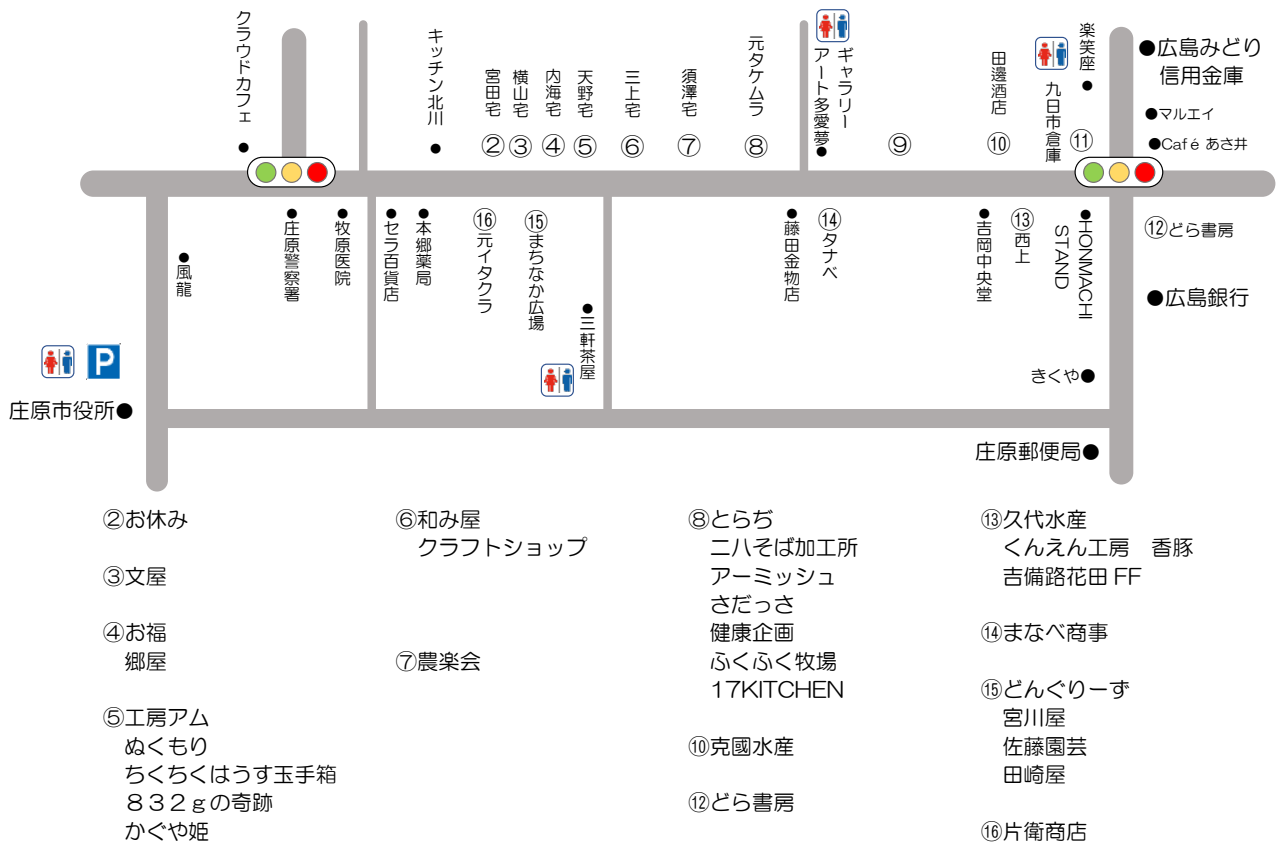
★風龍→九日市スペシャルで餃子200円！

★カフェクラウド→タピオカドリンク100円引き

九日市特製ピタサンド600円

★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き

## 出店配置図



出店申込みは、【毎月 20 日締切】 コンパネ 1 枚スペース 1,000 円～ 九日市愛好会事務局  
〒727-0013 庄原市西本町 2-1-10 楽勝座内 TEL/FAX 0824-72-8285

ホームページ  
<http://www.kunchi-ichi.jp>

